

## 妻のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係 —中学生の家庭を対象として—

尾形 和男\* 坂西 友秀\*\* 福田 佳織\*\*\* 森下 葉子\*\*\*\*

\*学校教育講座 (心理学)

\*\*埼玉大学教育学部

\*\*\*東洋学園大学人間科学部

\*\*\*\*文京学院大学人間学部

## A Study on the Wife's Work-Life Balance and Marital Relationship in Junior High School Student's Family

Kazuo OGATA\*, Tomohide BANZAI\*\*,  
Kaori FUKUDA\*\*\* and Yoko MORISITA\*\*\*\*

\*Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*The Faculty of Education, Saitama University, Saitama 338-0825, Japan

\*\*\*The Faculty of Human Sciences, Toyo Gakuen University, Nagareyama 270-0161, Japan

\*\*\*\*The Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University, Fujimino 356-8533, Japan

### 問題と目的

ワーク・ライフ・バランスについての意識は最近徐々に高くなってきているようであるが、仕事と家庭の両立に関しては特に難しい問題の1つとして考えられているようである。

本来、ワーク・ライフ・バランスは家庭と職業とのバランスを取ることに由来し、生活の質そのものを向上させようとする考えである。しかし、我が国の場合、他の国に比較して労働時間が長く(総務省, 2013)、仕事と家庭の両立が必ずしも進行しているとは言えない状況にある。

ワーク・ライフ・バランスについては、従来男性に関連する問題として捉えられる傾向が強かった。それは、男性は仕事中心、女性は家庭中心とするジェンダーバイアスに基づく固定的な観念がその要因とも考えられる。しかし、近年女性の社会進出が進み着実に就労者数が増加しており、平成23年現在、雇用者数総数に占める割合が42.7%となっており(厚生労働省, 2011)、このような状況において、女性の労働において果たす役割は重要性を増していると考えられる。したがって、男性と同様に家庭と仕事の両立に関わるワーク・ライフ・バランスが家庭と家族成員に及ぼす影響については、女性についても検討を加えることが重要な課題として捉える必要があると考えられる。

特に女性の場合、働き方の意識に関してライフステージによってもその様子が異なることが指摘されて

いる。例えば、子どもが小さな時は働きたくないという人がいるものの、子どもが中学生以上の場合には9割以上の方がフルタイムで働くことを希望しているとの指摘がある(内閣府男女共同参画局, 2010)。乳幼児期は子育てに時間がかかるために、子どもが成長し母親の手がかからなくなる時期に到達すると仕事に就いて自分の生き方を充実させようとする生き方を選択する女性が多いということになる。しかし、9割という数字には到達していないものの、女性のライフステージの上での変化に伴って生じる現実的な問題として注目すべき点である。

一方、ライフステージにも基づくワーク・ライフ・バランスを系統的に検討した研究は見当たらない。従来の先行研究はその多くが乳幼児期を中心として子育てにあっている家庭に焦点を当てて、特に父親の仕事と家庭への関わりについて検討したもの(例えば、Kitzmann, 2000; 尾形・宮下, 2000; 菅原・八木下・琢磨・小泉・瀬地山・菅原・北村, 2002; 加藤, 2004; 尾形・宮下・福田, 2005; 青木・岩立, 2005)、妊娠期の家庭の男性の関わりと家族への影響を検討したもの(尾形, 2013)、また仕事に就いている成人のストレスをワーク・ファミリー・コンフリクトの視点から検討したもの(例えば、金井, 1993; 金井, 2006; Innstrand, Langballe, Espenes, Falkum & Aasland, 2008))などがあげられる。その多くは男性のワーク・ライフ・バランスを取り上げているが、その中でも金井(1993, 2006)は特に女性のワーク・ライフ・バランスについて

の検討を加えている。

女性の社会進出に伴って、ライフステージにおける女性の生き方が変化している現在、ライフステージの変化をより具体的に検討することが必要と考える。

また、共働き家庭が増加している現在、男性のワーク・ライフ・バランスのみならず女性のワーク・ライフ・バランスを検討することも合わせて不可欠である。それは、女性として仕事に就くことによって、夫との関係、子どもとの関係、そして家族全体への影響にも関連してくると考えられるからである。

本研究では、上述の視点に基づいて、女性のワーク・ライフ・バランスを取りあげる。その際、中学生を育てている家庭を対象とする。中学生を取り上げたのは、女性就業者の仕事に対する満足度が末子の子どもが、7歳～12歳と16歳～18歳の小学校から高校生を育てている家庭において下降線を取り最も低くなるからである（労働政策研究・研修機構，2011）。これは、「育児・子育て期」において男性の育児・子育てへの参画が低く、そのために女性の育児・育てに負担がかかっているためと考えられる。この時期の母親と父親のワーク・ライフ・バランスは夫婦相互の生活や精神的健康に影響を及ぼすと考えられる。特に、家事・育児に直接関わることの多い女性が、仕事との両立をいかに図るかということは、男性の家庭生活のみならず、仕事や精神的な健康にも影響をもたらすことは十分に推測できることである。

このような観点から、本研究では中学生の子育てにあたっている家庭に焦点をあてて、次のことを明らかにすることを目的とする。

まず、妻のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係（夫から見た夫婦関係と妻自身から見た夫婦関係）にどのように影響をもたらすのかを検討する。次に、妻のワーク・ライフ・バランスが家族成員である、夫と妻自身のストレスにどのような影響をもたらすのかを検討する。

## 方法

### 1. 調査対象者

愛知県在住の中学生とその共働き家庭（父親と母親）445世帯。(1) 職業：(夫〈会社員252名，教員8名，公務員15，自営業47名，その他123名〉，妻〈会社員57名，教員15名，公務員11名，自営業2名，パートタイム311名，その他51名〉)。(2) 子どもの性別：男性218名，女性218名，不明9名。(3) 子どもの平均年齢：(男性：13.93歳，女性14.05歳)。

### 2. 調査用紙

妻用：1. ①夫・妻の職業 ②家族構成 ③子どもの年齢と性別を問う質問紙，2. 妻のワーク・ライフ・

バランスを調べる調査用紙〔尾形（2010）を参考に作成〕3. 夫婦関係を調べる調査用紙〔諸井（1997）を参考に作成〕4. 妻のストレスを調べる調査用紙〔清水・今栄（1981）〕5. 子どものストレスを調べる調査用紙〔清水・今栄（1981）〕6. 妻の子どもとの過ごし方について問う質問紙〔林・岡本（2005）〕

夫用：1. 夫のワーク・ライフ・バランスを調べる調査用紙〔尾形（2010）を参考に作成〕2. 夫婦関係を調べる調査用紙〔諸井（1997）を参考に作成〕3. 家族機能を調べる調査用紙〔渡辺（1989）〕4. 夫のストレスについて調べる調査用紙〔清水・今栄（1981）〕

妻用，夫用に別々に冊子にして封筒に入れ，アンケートを受けてくれる家庭に趣旨説明の後にアンケートの説明をし，配布した。各家庭で夫と妻そして中学生別々に記入していただいたものをまとめてもらい，回収した。

本研究では目的から，妻用の質問紙1～4，夫用の質問紙2，4を分析の対象とした。

### 3. 調査時期

2011年9月～2012年5月

## 結果

### 1. 質問紙の構造化

妻のワーク・ライフ・バランスの構造化を図るために因子分析（主因子法，*promax*回転）を実施し，「仕事関与」「夫・家族との交流」「余暇時間の活用」「町会への関与」の4因子を抽出した（順位に $\alpha = .785, .721, .722, .754$ ）抽出した（Table 1）。

次に，夫婦相互の認知に基づく夫婦関係の構造化を図るために，夫と妻別に因子分析（主因子法，*promax*回転）を実施した。その結果，妻については「相互の信頼感」「相互のコミュニケーション」「夫への要望」の3因子（それぞれ $\alpha = .959, .867, .752$ （Table 2）），夫については「相互の理解と尊敬」「相互のコミュニケーション」「妻への要望」の3因子が抽出された（それぞれ $\alpha = .955, .832, .791$ （Table 3））。

次に，妻・夫のストレスについても因子分析（主因子法，*promax*回転）を実施したが，妻と夫については「不安感」と「圧迫感」の各因子が抽出された。（ $\alpha$ 係数は妻の「不安感」が.866，「圧迫感」が.865であった。夫については「不安感」が.852，「圧迫感」が.818であり高い信頼性が確認された（Table 4，Table 5））。

### 2. 妻のワーク・ライフ・バランスの構造的把握

妻のワーク・ライフ・バランスの構造的把握に関して，ワーク・ライフ・バランスを構成する各因子間にどのような関連性が存在するのかを検討するために各因子の下位尺度をZ得点に換算して階層的クラスタ分

Table 1 妻のワーク・ライフ・バランス (主因子法promax回転後)

項 目	因 子	I	II	III	IV
〈仕事関与 $\alpha = .785$ 〉					
12. 私は仕事が行うまく行っているときは、表情に出やすい		<b>.746</b>	.030	-.019	.064
11. 私は仕事が順調なとき、家族とよく話をする		<b>.676</b>	.024	.026	.006
10. 私は休暇の時でも仕事のことが頭から離れないことがある		<b>.633</b>	-.096	-.101	-.074
8. 私は家族と話をするとき、仕事のことが多い		<b>.629</b>	-.097	-.101	-.039
9. 私は仕事のことで悩んだり喜んだりしている		<b>.580</b>	.126	.053	-.016
13. 私は仕事の話をするとき、生き生きとしていると思う		<b>.530</b>	.086	.049	.176
〈夫・家族との交流 $\alpha = .721$ 〉					
1. 私は休暇のとき、妻と一緒にいる時間を大切にしている		.135	<b>.693</b>	-.027	-.042
3. 私は休暇のとき、家族のみんなを誘って出かけることがある		.063	<b>.602</b>	.009	.072
* 5. 私は忙しくて家族との会話は少ない		-.230	<b>.553</b>	-.065	.038
2. 私は家族で食事をするとき、仕事のことでなくいろいろな話をしている		-.037	<b>.535</b>	.102	-.038
19. 時間を作って妻と旅行などに行きたいと思う		.176	<b>.530</b>	.106	-.108
* 6. 私は休暇の時、家族とかかわらず、一人でのんびりしていることがある		-.106	<b>.439</b>	-.351	.068
4. 私は子どもの将来のことについてよく相談にのる		-.029	<b>.431</b>	.050	0.67
〈余暇時間の活用 $\alpha = .722$ 〉					
21. 自分の趣味など時間をとってゆっくと楽しむのが好きだ		-.058	.065	<b>.774</b>	-.118
14. 私は時間があるときは、自分の趣味を行うことがある		.022	.060	<b>.637</b>	-.168
20. 時間を作って、自分が楽しめることをしたいと思う		-.066	.020	<b>.602</b>	.208
15. 日曜日などは自分の時間を作って楽しむ		-.021	-.055	<b>.542</b>	.253
〈町会への関与 $\alpha = .754$ 〉					
16. 町会など近隣の仕事に関わるのは楽しい		.069	.002	.005	<b>.858</b>
* 17. 町会など近隣の仕事に関わるのはおっくうである		-.057	.010	-.104	<b>.780</b>
22. 休日など地域との関わりが多い方だ		.059	.005	.121	<b>.472</b>
因子相関		I			
		II	.035		
		III	.141	.079	
		IV	.011	.031	.124

(\*は逆転項目を示す)

Table 2 妻の認知する夫婦関係 (主因子法promax回転後)

項 目	因 子	I	II	III
〈相互の信頼感 $\alpha = .959$ 〉				
7. 私と夫の関係は、非常に安定している		<b>.967</b>	-.086	-.030
9. 夫との関係によって、私は幸福である		<b>.965</b>	-.056	-.073
11. 私は夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う		<b>.898</b>	-.084	.043
6. 私たちは、申し分のない結婚生活を送っている		<b>.895</b>	-.063	-.062
8. 私たちの夫婦関係は強固である		<b>.826</b>	-.029	.017
13. 夫婦でお互いを思いやっている		<b>.810</b>	.026	.032
10. 私はまるで自分と夫が同じチームの一員のように感じている		<b>.792</b>	.022	-.001
19. 私は夫を尊敬している		<b>.771</b>	.027	.077
12. 夫は夫婦の会話を大事にしている		<b>.677</b>	.147	-.085
14. 私が悩んでいるとき夫は相談相手になってくれる		<b>.625</b>	.250	-.051
20. 私は夫とできるだけ一緒に出かけたり、旅行がしたい		<b>.609</b>	.117	.154
5. 私は夫から受け入れられている		<b>.605</b>	.187	.001
〈相互のコミュニケーション $\alpha = .867$ 〉				
2. 夫にはいろいろ話ができる		.193	<b>.796</b>	-.043
3. 私は夫とは何でも話ができる		.145	<b>.738</b>	.026
* 4. 夫には頼みたいことがあっても何となく言い出しにくい		-.116	<b>.681</b>	-.025
1. 私は夫と納得のいくまで話をすることがある		.193	<b>.620</b>	.006
〈夫への要望 $\alpha = .752$ 〉				
16. 夫には家庭や家族のことについてできるだけ関心を持ってほしい		-.141	.129	<b>.789</b>
17. 夫には私の話をよく聞いてほしい		.102	.013	<b>.775</b>
15. 夫には私の考えを受け入れて尊重してほしい		.228	-.136	<b>.561</b>
18. 夫には子どもに今まで以上に関わりを持ってほしい		-.150	-.089	<b>.547</b>
因子相関		I		
		II	.724	
		III	.243	.184

(\*は逆転項目を示す)

Table 3 夫の認知する夫婦関係 (主因子法promax回転後)

項 目	因 子	I	II	III
〈相互の理解と信頼感 $\alpha = .955$ 〉				
11. 私は夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う		<b>.942</b>	-0.73	-0.05
19. 私は妻を尊敬している		<b>.933</b>	-2.12	.054
9. 妻との関係によって、私は幸福である		<b>.851</b>	.024	-0.03
13. 夫婦でお互いを思いやっている		<b>.823</b>	.037	.013
12. 妻は夫婦の会話を大事にしている		<b>.814</b>	.031	-0.35
10. 私はまるで自分と妻が同じチームの一員のように感じている		<b>.797</b>	.036	.014
14. 私が悩んでいるとき妻は相談相手になってくれる		<b>.729</b>	.072	.029
8. 私たちの夫婦関係は強固である		<b>.700</b>	.190	-0.27
6. 私たちは、申し分のない結婚生活を送っている		<b>.692</b>	.109	-0.25
20. 私は妻とできるだけ一緒に出かけたり、旅行がしたい		<b>.671</b>	.006	.148
7. 私と妻の関係は、非常に安定している		<b>.601</b>	.291	-0.86
5. 私は妻から受け入れられている		<b>.577</b>	.291	-0.47
-----				
〈相互のコミュニケーション $\alpha = .832$ 〉				
3. 私は妻とは何でも話ができる		.115	<b>.806</b>	.027
2. 妻にはいろいろな話ができる		.144	<b>.759</b>	.068
* 4. 妻には頼みたいことがあっても何となく言い出しにくい		.099	<b>.453</b>	-0.84
-----				
〈妻への要望 $\alpha = .791$ 〉				
17. 妻には私の話をよく聞いてほしい		.001	.009	<b>.898</b>
16. 妻には家庭や家族のことについてできるだけ関心を持ってほしい		-0.050	.123	<b>.724</b>
18. 妻には子どもに今まで以上に関わりを持ってほしい		.077	-0.71	<b>.590</b>
15. 妻には私の考えを受け入れて尊重してほしい		.159	-0.78	<b>.581</b>
	因子相関	I		
		II	.745	
		III	.224	.1543

(\*は逆転項目を示す)

Table 4 妻のストレス (主因子法promax回転後)

項 目	因 子	I	II
〈不安感 $\alpha = .866$ 〉			
6. 私はピリピリしている		<b>.744</b>	-1.07
* 2. 私は安心している		<b>.730</b>	-1.01
7. 私はイライラしている		<b>.725</b>	-0.059
4. 私は不安である		<b>.667</b>	.092
* 1. 私は平静である		<b>.651</b>	-1.04
* 9. 私はリラックスしている		<b>-.645</b>	-0.050
* 5. 私は気分がよい		<b>-.572</b>	-0.11
8. 私はなにかしら緊張している		<b>.543</b>	.156
3. 私は何かまずいことが起こりそうで心配である		<b>.540</b>	.072
-----			
〈圧迫感 $\alpha = .865$ 〉			
18. 私はささいなことに思わずらうことがある		-0.030	<b>.817</b>
16. 私は物事を難しく考える傾向がある		.049	<b>.785</b>
14. 私は困難なことが重なると圧倒されてしまう		-0.056	<b>.753</b>
13. 私はすぐに決心がつかず迷いやすい		-0.129	<b>.733</b>
19. 私はひどくがっかりしたときには気分転換ができない		.116	<b>.651</b>
20. 身近な問題を考えるとひどく緊張し混乱する		.181	<b>.645</b>
15. 実際にはたいしたこともないことが気になってしかたがない		-0.005	<b>.536</b>
17. 私はやっかいなことは避けて通ろうとする		-0.097	<b>.408</b>
	因子相関	I	
		II	.525

(\*は逆転項目を示す)

Table 5 夫のストレス（主因子法promax回転後）

項 目	因 子	I	II
〈不安感 $\alpha = .852$ 〉			
7. 私はイライラしている		.877	-.091
6. 私はビリピリしている		.838	-.108
* 2. 私は安心している		.717	-.061
4. 私は不安である		.717	.063
8. 私はなにかしら緊張している		.660	.037
3. 私は何かまずいことが起こりそうで心配である		.648	.005
* 5. 私は気分がよい		.643	.018
* 1. 私は平静である		.627	.025
* 9. 私はリラックスしている		.566	.027
10. 私は心配事が多い		.492	.246
-----			
〈圧迫感 $\alpha = .818$ 〉			
14. 私は困難なことが重なると圧倒されてしまう		-.210	.926
13. 私はすぐに決心がつかず迷いやすい		-.176	.818
15. 実際にはたいしたこともないことが気になってしかたがない		.134	.715
18. 私はささいなことに思いわずらうことがある		.143	.694
16. 私は物事を難しく考える傾向がある		.065	.686
19. 私はひどくがっかりしたときには気分転換ができない		.150	.621
17. 私はやっかいなことは避けて通ろうとする		-.010	.577
20. 身近な問題を考えるとひどく緊張し混乱する		.292	.554
	因子相関	I	II
			.610

(\*は逆転項目を示す)

析（ウォード法）を行った。抽出されたデンドログラム及び解釈可能性から5つのクラスタ構造を妥当と判断した。Figure 1によると、クラスタ1は「家庭関与」「町会への関与」「余暇時間の活用」の順に高く、家庭を中心とした関わりであるので「家庭中心の関わり」と命名した。クラスタ2は全ての関わりがマイナスを示しており、活動性が低いので「低活動」と命名した。クラスタ3は「仕事関与」「家庭関与」の2領域がプラスであり、特に「仕事関与」の方が高いので「仕事を中心とした家庭関与」と命名した。クラスタ4は全ての領域がプラスになっているのが特徴であるが、「仕事関与」が特に高く、次いで「町会への関与」「余暇時間の活用」の銃に順に高いので「仕事と町会活動」と命名した。クラスタ5については、余暇活動のみプラスであり余暇活動を中心とする生活であるので「余暇時間の活用中心」と命名した。

### 3. 妻のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係・ストレス

妻のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係にどのような影響をもたらしているのかを検討するために、夫と妻の認知する夫婦関係、夫と妻のストレスの各因子の下位尺度得点を算出した。そして、ワーク・ライフ・バランスの5つのクラスタを独立変数、夫婦関係、夫婦のストレスを従属変数として一元配置分散分析を行った。各変数に有意差が見られる場合には多重比較（Tukey法）を行った。結果をTable 6に示す。

夫婦関係について、妻自身が認知する夫婦関係と夫の認知する夫婦関係に妻のワーク・ライフ・バランスがどのような影響をもたらしているのかを検討した。妻の認知する夫婦関係について見た場合、妻の「相互の信頼感」では「家庭中心の関わり」が「低活動」「余暇時間の活用中心」の各クラスタよりも有意に高いことが示された。「低活動」は「仕事を中心とした家庭関与」「仕事と町会活動」の各クラスタよりも有意に低い値を示した。また、夫婦関係の「相互のコミュニケーション」では「家庭中心の関わり」が「低活動」「余暇時間の活用中心」よりも有意に高い値を示した。「低活動」は「仕事を中心とした家庭関与」「仕事と町会活動」よりも有意に低い値を示した。さらに「仕事を中心とした家庭関与」と「仕事と町会活動」は「余暇時間の活用中心」よりも有意に高い値を示した。一方、夫婦関係の「夫への要望」については、クラスタ「仕事を中心とした家庭関与」が「家庭中心の関わり」「低活動」「余暇時間の活用中心」のいずれのクラスタよりも有意に高い値を示すことが確認された。

また、夫の認知する夫婦関係については「相互の理解と尊敬」においてクラスタ「家庭を中心とした関わり」は「低活動」「余暇時間の活用中心」の両クラスタよりも有意に高い値を示した。また、クラスタ「仕事を中心とした家庭関与」「仕事と町会活動」は「低活動」よりも有意に高い値を示した。さらに「仕事を中心とした家庭関与」は「余暇時間の活用中心」よりも

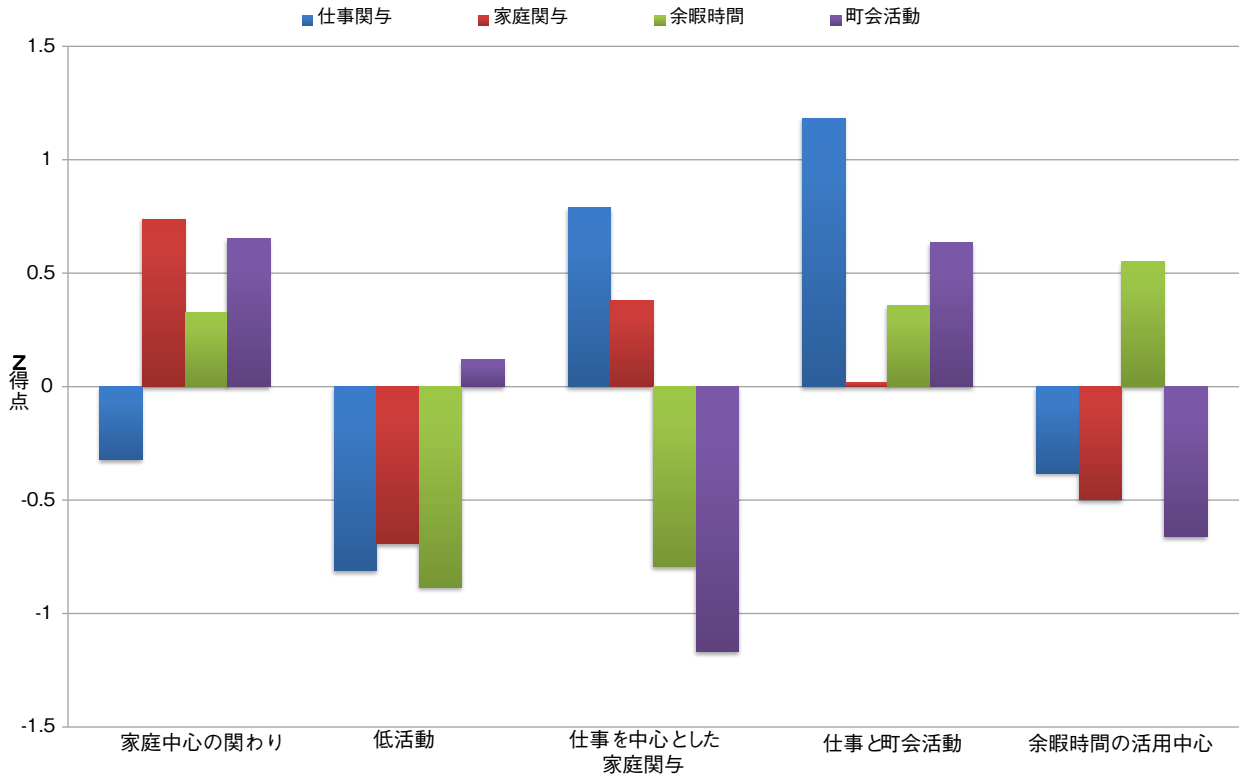


Figure 1 妻のワーク・ライフ・バランス

Table 6 クラスタ別に見た夫婦関係と夫婦のストレス

夫婦関係と ストレス		クラスタ I	クラスタ II	クラスタ III	クラスタ IV	クラスタ V	F値	多重比較
		M (SD) N	M (SD) N	M (SD) N	M (SD) N	M (SD) N		
夫の認知する 夫婦関係	相互の理解と信頼	4.01 (.62) 104	3.38 (.87) 67	4.04 (.75) 52	3.82 (.74) 73	3.55 (.82) 83	10.70***	I > II, V    III, IV > II    III > V
	相互のコミュニケーション	3.71 (.76) 106	3.30 (.83) 67	3.91 (.75) 53	3.54 (.63) 73	3.29 (.70) 83	8.73***	I > II, V    III > II, V
	妻への要望	3.25 (.84) 102	3.26 (.82) 67	3.13 (.87) 54	3.32 (.79) 73	3.17 (.67) 84	.574	
妻の認知する 夫婦関係	相互の信頼感	3.94 (.67) 106	3.08 (.90) 70	3.72 (.83) 53	3.64 (.79) 67	3.38 (.77) 84	14.81***	I > II, V    III, IV > II
	相互のコミュニケーション	3.76 (.87) 107	2.94 (.82) 71	3.63 (.96) 54	3.59 (.93) 72	3.18 (.99) 85	11.33***	I > II, V    III, IV > II    III, IV > V
	夫への要望	3.58 (.68) 108	3.45 (.69) 72	3.93 (.70) 53	3.60 (.76) 71	3.47 (.71) 85	4.46**	III > I, II, V
夫のストレス	不安感	2.56 (.76) 104	2.66 (.70) 68	2.53 (.65) 51	2.64 (.72) 72	2.71 (.72) 82	.718	
	圧迫感	2.61 (.84) 102	2.65 (.75) 69	2.77 (.77.52)	2.72 (.76) 70	2.76 (.75) 84	.663	
妻のストレス	不安感	2.46 (.55) 107	2.79 (.52) 69	.278 (.77) 53	2.73 (.62) 71	2.67 (.61) 83	4.62**	II, III, IV > I
	圧迫感	2.81 (.78) 108	2.86 (.66) 72	3.24 (.81) 53	3.10 (.81) 71	2.99 (.79) 87	3.56**	III > I

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01

有意に高い値を示すことが確認された、また、夫婦関係の「相互のコミュニケーション」においてはクラスタ「家庭中心とした関わり」は「低活動」「余暇時間の活用中心」の両クラスタよりも有意に高い値を示した。また、「仕事を中心とした家庭関与」は「低活動」および「余暇時間の活用中心」よりも有意に高いことが示された。

以上のように、妻の認知する夫婦関係の「相互の信頼感」「相互のコミュニケーション」は「低活動」「余暇時間の活用中心」の各クラスタに示されるように、家庭への関わりがない場合に比較して家庭への関わり

を中心として、仕事、余暇活動、町会活動への関わりを持つ場合の方が高いことが示された。また、夫の認知する夫婦関係については、妻が「家庭」「仕事」「町会」「余暇」など複数に重なって生活している場合の方が「相互の理解と尊敬」「相互のコミュニケーション」が高いといえる。

夫婦の間のストレスについては妻の「不安感」と「圧迫感」にのみ有意な効果が得られた。下位検定を行ったところ、「不安感」は「家庭中心の関わり」が「低活動」「仕事を中心とした家庭関与」「仕事と町会活動」の各クラスタよりも有意に低いことが確認された。

「圧迫感」については、クラスタ「家庭中心の関わり」が「仕事を中心とした家庭関与」よりも有意に低いことが確認された。「家庭中心の関わり」には余暇活動への関わりも含まれており、この結果から妻のストレスは家庭への関わりを持ち、余暇活動も併存している場合に低いことが示されたといえる。

4. 夫の認知する夫婦関係・ストレスに及ぼす要因の検討

妻のワーク・ライフ・バランスの型を基本として夫の認知する夫婦関係を検討したが、更に詳細な検討を加えるために、妻のワーク・ライフ・バランスを構成する「仕事関与」「夫・家族との交流」「余暇時間の活用」「町会への関与」の4要因が夫の認知する夫婦関係と夫婦のストレスに及ぼす影響について検討を加えた。

ここでは、夫の認知する夫婦関係「相互の理解と尊敬」「相互のコミュニケーション」「妻への要望」の3因子とストレスの「不安」「圧迫」の各下位項目尺度得点を算出し、それぞれを従属変数、妻のワーク・ライフ・バランスの4因子の各下位尺度得点を算出し、それを独立変数とする重回帰分析（強制投入法）を実施した（Table 7）。

ここでは多重共線性の問題はみられなかった。

夫婦関係の「相互の理解と尊敬」については、「夫・家族との交流」で有意な正の標準偏回帰係数が確認さ

れた。「相互のコミュニケーション」については、「夫・家族との交流」で有意な正の標準偏回帰係数が確認された。しかし、「妻への要望」については有意な効果は確認されなかった。

また、「ストレス」の「不安感」において「夫・家族との交流」に有意な負の標準偏回帰係数が確認された。「圧迫感」では「夫・家族との交流」に有意な負の標準偏回帰係数が確認された。また、「仕事関与」において正の有意な傾向が確認された。

以上のことから、夫の認知する夫婦関係の「相互の理解と尊敬」「相互のコミュニケーション」ともに妻の仕事関与よりも、妻が家庭へ関わりを持つことが強く影響していることが確認された。また、妻の「夫・家族との交流」が夫のストレスを減少させることも併せて確認され、夫婦の良好な関係、夫のストレス軽減ともに妻の家庭関与を中心とするワーク・ライフ・バランスのあり方の重要性が示唆された。

考察

女性の社会進出に伴って、従来の男性中心のワーク・ライフ・バランスのあり方に以上に、女性のワーク・ライフ・バランスのあり方が求められている。

本研究はこのような視点から、中学生を持つ共働き家庭に焦点を当て、妻としてのワーク・ライフ・バランスが夫婦関係にどのような影響をもたらしているのかを検討を加えた。

まず、夫婦相互に夫婦関係をどの様に認知しているのかを検討するために、妻のワーク・ライフ・バランスの状況を基本においた。結果として妻の認知する夫婦関係については、「相互の信頼感」「相互のコミュニケーション」ともに、家庭への関わりを中心として仕事、余暇時間の活用、町会活動への参画など、幅広く活動している場合の方が高いことが示されている。このことは、妻が一人の女性として幅広く活動する中で自己の要望などが満たされ、精神的にも安定した状況を形成することが可能であると考えられる。しかも、妻としてのストレスとの関連で妻自身のワーク・ライフ・バランスとの関連性について検討を加えたが、「不安感」「圧迫感」の両ストレスはワーク・ライフ・バランスの「家庭中心の関わり」において有意に低いことが示された。「家庭中心」のワーク・ライフ・バランスは、他のワーク・ライフ・バランスに比較して家庭関与が一番多く、余暇時間の活用、町会活動への関わりなども多い。夫や子どものいる家庭での活動を基盤とするワーク・ライフ・バランスの重要性が示唆される。

また、夫の認知する夫婦関係については、妻が「家庭中心の関わり」あるいは「仕事を中心とした家庭関与」のワーク・ライフ・バランスを進めている場合の方が、他のワーク・ライフ・バランスのタイプよりも「相

Table 7 夫の認知する夫婦関係とストレスにおける妻のワーク・ライフ・バランス要因の標準偏回帰係数

		認知要因		
		R <sup>2</sup>	β	
〈夫の認知する夫婦関係〉	〈妻のワーク・ライフ・バランス〉	.248***	仕事関与	.051
			夫・家族との交流	.489***
			余暇時間の活用	.026
			町会活動への関与	-.069
相互の理解と尊敬	仕事関与	.202**	夫・家族との交流	.038
			余暇時間の活用	.438***
			町会活動への関与	-.025
				-.089
相互のコミュニケーション	夫・家族との交流	.009	仕事関与	.008
			余暇時間の活用	.065
			町会活動への関与	.067
				.006
妻への要望	〈妻のワーク・ライフ・バランス〉	.058**	仕事関与	.025
			夫・家族との交流	-.235***
			余暇時間の活用	-.031
			町会活動への関与	.028
〈夫のストレス〉	安心感	.031*	仕事関与	.105 <sup>†</sup>
			夫・家族との交流	-.148**
			余暇時間の活用	.055
			町会活動への関与	-.021
圧迫感	仕事関与	.031*	夫・家族との交流	.105 <sup>†</sup>
			余暇時間の活用	-.148**
			町会活動への関与	.055
				-.021

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05 †p<.10

互の理解と信頼」「相互のコミュニケーション」が有意に高いことが示されている。この結果については、夫から見て、妻が仕事に過度に関わるよりも家庭への関わりがあることが良好な夫婦関係を形成するために重要なことといえる。同時に、妻の家庭関与を中心とするワーク・ライフ・バランスのあり方が良好な夫婦関係形成のため夫婦共に共通した意識といえよう。

また、夫の認知する夫婦関係と夫自身のストレスに及ぼす要因について、妻のワーク・ライフ・バランスを構成している要素との関連で具体的に検討を加えたが、「相互の理解と尊敬」「相互のコミュニケーション」ともに「家庭中心の関わり」が有意に高い影響力を持つことが示され、夫にとっては妻が仕事よりも家庭へ関わるのが重要な要素として存在することが示されたが、このことは夫にとっても、自己のワーク・ライフ・バランスを推進する際には妻の家庭関与を中心とするワーク・ライフ・バランスとの比重を示す重要な視点と思われる。

以上のように、中学生を持つ家庭においては、妻の家庭を中心とするワーク・ライフ・バランスが良好な夫婦関係のあり方に影響を持つことが示唆された。これに関連して尾形（2010）は大学生を対象として、父親のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係に与える影響について検討を加え、家庭関与を中心として仕事に関わる場合、学生は夫婦関係が良好であると認識し、また家族で過ごす時間も長くなることを指摘している。つまり、親の家庭関与を中心とするワーク・ライフ・バランスは夫婦関係を中心として良好な影響をもたらすという結果を支持する結果と言える。同様に山口（2007）は、夫婦関係満足度は夫婦で共有する休日などでの「くつろぎ」「趣味・娯楽・スポーツ」、平日の「食事」「くつろぎ」などの共有が大きく影響し、それがまた夫婦の仕事に影響をもたらすとしてワーク・ライフ・バランスにおける夫婦関係の重要性を指摘している。本研究の結果から、ワーク・ライフ・バランスにおける家庭生活の重要性が指摘され、これら一連の研究を支持する結果が得られたと考える。

今回、女性の社会進出に伴うワーク・ライフ・バランスのあり方の変化について女性の状況について分析を加えた。しかし、現実的な視点として男性のワーク・ライフ・バランスも含めた分析が更に求められると考える。夫婦のそれぞれのワーク・ライフ・バランスを対比させることにより家庭の状況がより具体的に分析可能と考える。同時に家族メンバーである中学生の家庭生活の状況についても、両親のワーク・ライフ・バランスとの関連で分析を加えることが更に求められると考える。

## 引用文献

- 青木聡子・岩立京子 2005 幼児を持つ父親の育児参加を促す要因：父母比較による検討 東京学芸大学紀要第1部門, 56, 79-85.
- 林奈那・岡本祐子 2005 青年の家族に対する関与と家族アイデンティティ発達の関連 家族心理学研究, 19, 13-29.
- Innstrand, S.T., Langballe, E.M., Espenes, G.A., Falkum, E., & Aasland, O.G. 2008 Positive and Longitudinal study of reciprocal relations. *Work & Strees*, vol. 22, No. 1, 1-15.
- 金井篤子 2006 ワーク・ファミリー・コンフリクトの視点からのワーク・ライフ・バランス考察 季刊家計経済研究, 71, 29-35.
- 金井篤子 1993 働く女性のキャリア・ストレスに関する研究 社会心理学研究, 8 (1), 21-32.
- 加藤邦子 2004 男性における仕事と育児の両立要因—充実感を持つためのモデルの検討— 家庭教育研究所紀要, 26, 110-127.
- Kitzmann, K.M. 2000 Effects of marital conflict on subsequent triadic family interactions and parenting. *Developmental Psychology*, 36, 3-13.
- 厚生労働省 2011 平成23年版 働く女性の実情 厚生労働白書
- 諸井克美 1997 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の公平性—女子青年の場合— 家族心理学研究, 11, 2, 69-81.
- 内閣府男女共同参画局 2010 男女共同参画白書
- 尾形和男 2013 妊婦の夫婦関係と精神的ストレスに関する研究—夫のワーク・ライフ・バランスと妻の視点から— 愛知教育大学研究報告, 62, 89-97.
- 尾形和男 2010 父親のワーク・ライフ・バランスについての一考察—夫婦関係、家族メンバーの生活、子どものワーク・ライフ・バランス観との関係—愛知教育大学研究報告, 59, 99-106.
- 尾形和男・宮下一博 2000 父親と家族—夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス、幼児の社会性の発達及び父親自身の成長発達— 千葉大学教育学部研究紀要, 48, 1-14.
- 尾形和男・宮下一博・福田佳織 2005 父親の協力的関わりと家族成員の適応—母親役割・妻役割達成感、子どもの攻撃性、父親のストレス・コーピングとの関係— 家族心理学研究, 19, 31-45.
- 労働政策研究・研修機構 2011 平成21年度日本人の就業実態に関する総合調査 JILPT 調査シリーズ NO. 89-2.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 総務省統計局「労働力調査」2013 総務省
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊介 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として—教育心理学研究, 50, 129-140.
- 渡辺さちや 1989 家族機能と自我同一性地位の関わり—青年期の自我の自立をめぐる— 家族心理学研究, 2, 85-89.
- 山口一男 2007 夫婦関係満足度とワーク・ライフ・バランス 季刊家計経済研究, 73, 55-60.



## 謝辞

本研究の実施にあたり、科学研究費（基盤研究（C）  
（1）課題番号 23530661，研究代表者：尾形和男）を受けた。調査の実施にあたり、多くのみなさまのご協力を頂いた。これらの方々に心より感謝申し上げます。

（2013年9月26日受理）